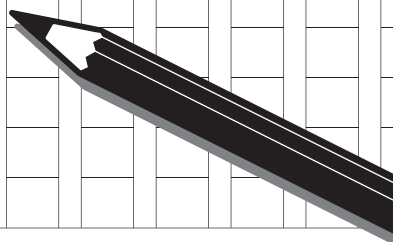


令和6年度

第10回 藤原正彦

エッセイコンクール



入賞作品集



姫路文学館

姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一作を選考するものです。

記念すべき第十回目を迎えた今回は、全国から二二七六点の力作が寄せられました。

〈へ生（な）きることは創（つく）ること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはずです。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

目次

■中学生部門

最優秀賞 「絵空事の世界」 兵庫県 明石市立衣川中学校 二年 小池 七海 …… 4

優秀賞 「祖父の涙」 兵庫県 姫路市立琴陵中学校 二年 中谷 璃子 …… 8

佳作 「十三歳の私達」 兵庫県 小林聖心女子学院中学校 二年 安賀 奈穂 …… 12

■高校生部門

最優秀賞 「日常のかげら」 兵庫県立姫路西高等学校 二年 杉本 英 …… 16

優秀賞 「街の「小場所」が残してくれたもの」 広島県 盈進高等学校 一年 足立 美咲 …… 20

佳作 「十九歳の母と私」 兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 一年 桂 凜香 …… 24

■一般部門

最優秀賞 「母の終活」 福岡県 福岡市（図書館司書） 山本 築 …… 28

優秀賞 「何もない春」 大阪府 河内長野市（カメラマン・観光ライター） 吉沢慎一郎 …… 32

佳作 「地下鉄のクリスマス」 アメリカ ニューヨーク（自営業） 茂木 麻予 …… 36

■概要 …… 40

第十回

藤原正彦エッセイコンクール

入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

絵空事の世界

兵庫県 明石市立衣川中学校 二年

小池 七海

私の趣味は、頭の中で自分だけの物語を考えることだ。これはもはや習慣というか、無意識でも気がつけば始めてしまうほどのものである。

私が空想に浸り始めたのは、いったいいつ頃のことだっただろうか。きっかけというのは、おそらく小学校低学年の頃に友人たちと行っていたごっこ遊びからだろう。そのごっこ遊びは、それぞれが決まったキャラクターになりきって行うものであった。元々存在するアニメのキャラクターでもいいし、自分で一から考えたものでもいい。とにかく、好きなものになりきって遊ぶ、というのが、当時の私たちの流行りだったのだ。

そのブームは、いつも遊んでいたメンバーとクラスが離れてからというもの、パタリと終わってしまったのだが。それ以降も、私の脳内ではその時創作したキャラクターの物語は、延々と続いていたのであった。

そんな私も、今や中学生。私の脳内でのみ止まることを知らないその物語は、主人公や登場人物などは時が経つにつれ移り変わってきたものの、ざっくりとした大元の世界観は

どこか面影を残したままである。ちなみに、今現在の主人公格である少女は、ざっと六代目である。

そんな私の日常は、常に現実と空想世界を行き来しているようなものである。そう、たとえ授業中であろうとも。いや、別に授業に集中していないわけではない。それでも授業は真面目に受けているつもりである。発表も大好きだし、先生の話も楽しんで聴いていることが多い。しかし、それとこれとは話が違うのである。私の作る物語は、現実で起きた出来事をもとに、さまざまな要素を足して創り上げていることが多いため、勝手に出来上がってしまうのである。簡単にいうと、身の回りで起きた出来事全てが瞬時に小説化されていくイメージである。

そんなわけで、私は今日も空想を糧に現実の世界を生きていた。

私はいつも寝る時間と起きる時間がバラバラである。ベッドに入ってもなかなか寝付けないことも多い。そんな時はまた自分の空想世界（脳内ワールド）に潜るのだ。さて、今日はどんな物語にしようか。まずは日中の出来事にまつわるエピソードを整理していかなければ。そうして考えるうちに、少しずつ夢の世界へと旅立っていくのが常である。

朝、目が覚めると同時に私の脳内ワールドも動き出す。良い朝だとやはり気分も良い。ここに小鳥の歌が合わさればもう完璧だ。そんな日には、私の空想も捗るというわけであ

る。まあ、逆に言えば、寝坊などした日には脳内キャラクターたちもいじけていたり、良くも悪くも私自身の感情が反映されるということでもあるのだが。ちなみに、私の起床時刻は早くて3時半、遅くて7時半過ぎという認識である。平日の場合に限り。夜は寝るまでその日！という勝手な自論を展開しているため、日によってこの時間は朝、この時間は夜：という認識も変わってきたりもするが。まあ基本として、4時から朝でいいだろう。おそらく。

そんなこんなで身支度を終え、学校へと向かう。早朝から起きていた日には宿題や勉強もこれまでに済みます。早く起きた日は気分も良く、集中できるものである。早起きは三文の徳ともいうが、先人たちの言葉は的確であると常々感じる。

学校では基本的に本を読んだりして過ごすことが多い。他の子と喋ることもあるが、自分から話しかけにくいのはあまり得意ではなかったりする。とか言いつつ結局寂しくなつて話しかける相手を探してみたりもする。一人好きの寂しがり屋。わがままで面倒な性格であることは自覚している。そしてまた空想に潜ることもある。本を読んでいればネタは集まる上、空想上では誰でも私の自由自在。もはや私は神である。私の脳内に限り。

そうして一日は過ぎていく。宿題は嫌いだが、他の子の意見を知ることができる授業は

私の楽しみでもある。学校が苦になるタイプでなくて良かった。本当にありがたいことだ
と思う。宿題や自主学習といったものは本当に嫌いだ。教科書を読むのは楽しめるのに、
不思議なものである。てな話とある友人にしたら、教科書は読み物じゃない的なツッコ
ミをくらったこともあるような。私にとっては国語辞典ですら楽しい読み物なのだが。空
想のための知識を広げるのにもだいぶと役立っている気がする。そもそも幼い頃から活字
が書かれたものにはすぐに興味を示すタイプだったと、母からも聞かされた。三つ子の魂
百まで。先人たちの言葉はまたしても的確である。

そんなこんなで、私の日々は空想世界と共に移ろい、巡っていく。私の物語に終止符が
打たれるのは、一体いつになることやら。

中学生部門

優秀賞

兵庫県 姫路市立琴陵中学校 二年

祖父の涙

中谷 璃子

今年の春、三月二十六日に私の母方の祖父が亡くなった。私は前日の深夜まで祖父の病室にいたが、体力の限界もあり、母に車で父が待つ家まで送ってもらい、私と父は自宅、母だけが病室に残った。その夜は、今日が祖父の最期の日になるかもしれないという不安を抱きながら布団に入った。朝まで一睡もできないだろうと思っていたが、意外にも体は疲れていて、目をつぶってしばらくじっとしていると、いつの間にか窓の外が明るくなっていた。昨日の私の気持ちとは真反対なくらいの晴天だった。リビングに父がいるだろうと思いい下に降りるとそこには誰もおらず、私のスマホだけがテーブルの上にあった。電源をつけると父と母から写真とメッセージが来ていて、「祖父が今朝亡くなったから、今日から部活も休んで大和会館に泊まることになる。」という内容だった。私は迎えに来た母の車で急いで会館へと向かった。普段はよく話す母も、その時はとても真剣で、空気が違っているような気がした。車の中でいろんなことが頭を巡った。その中でも、祖父を直接見送ってあげられなかったことが一番の心残りだった。昨日の夜、家に帰らずに無理をして

でも病室にいればよかった。祖父の手をもつと握っておけばよかった。祖父が生きている間には考えもしない、亡くなってしまってから気づいた後悔がたたくさん思い浮かび、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

お葬式までしばらくは会館に泊まることは聞いてはいたが、どんなところだろうという緊張は強かった。けれど部屋は想像していたより広く、私たち家族といとこたち、それと別の部屋に祖父（部屋自体は一緒だが襖で区切られている）という少し不思議な空間で三日間を過ごすことになった。でも、私は一人っ子でいとは姉弟、生活リズムも違うし、お互いの性格だつて深く理解していない。まず一緒に過ごすこともあまりなかったため、肉体的にも、精神的にもしんどい日が続いた。早起きだった私は毎朝、祖父の枕元の水を変えたり、お線香を焚いて自分の様子を伝えることを欠かさなかった。祖父はドライアイスで冷やされていて頬や手は冷たかったけれど、とても幸せそうな顔をしていて、本当は亡くなっていないのではないかと思わせるくらい今にも起き上がってきそうな表情だった。

夜はあまり眠れなかったが、祖父のことを思い出すといつの間にか寝ていて、きっと祖父が眠れない私を心配してくれているのだと嬉しく思った、けど、もう祖父はこの世にい

ないんだと改めて思い、胸が痛くなった。

そして迎えた葬式当日。式中はずっと涙が止まらなくて、ハンカチ一枚では抑えきれないほどだった。「今までありがとう。」と言おうと棺の中の祖父の顔を見ると涙が溢れてきて、かけようとしていた言葉が喉につつかえて何も出てこなくなり、私はただその場に突っ立って泣いているだけになってしまった。

祖父はその後霊柩車に乗せられ火葬場へ向かうことになり、私はてっきり助手席には喪主である母が乗るものだと思っていたが、母は自分の車があるから、と私を代理にしてその場を去った。急なことで驚いたが、少しでも祖父に恩返しができるなら、と進んで車に乗り込んだ。運転手さんがクラクションを長く鳴らしたとき、サイドミラーからいこたちの姿が見えた。みんなお手本のように声を上げ泣いていて、色んな感情が押し寄せ、静かに泣くことしかできなかった私は、劣等感と罪悪感を強く感じて、気づけば遺影の角を強く握りしめていた。ごめんなさい、いい孫じゃなくて。と、祖父が聞いたならそんなこと言うなと怒鳴ってきそうなことをずっと考えていた。少しでも咲いていた桜を見て、亡くなる前に桜が見たかったと祖父が言い残していたことをふと思い出した。だが病院の近くに桜の木はなく、最期まで見せてあげられなかったのは残念だったけれど、会館に向かう

道中、まるで祖父をあたたかく見送っているかのようにいくつも桜が咲いており、感動した私は「よかったね、よかったね。」と何度も声をかけた。私の涙が遺影の目の部分にちょうどこぼれて、まるで祖父が桜を見て喜んでいるようだった。

祖父が亡くなってしばらく経つが、今でもあの感動は、色褪せることなく私の脳裏に残り続けている。

中学生部門

佳作

十三歳の私達

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 二年

安賀 奈穂

これは十三歳で人生が終わる少女と十三歳で未来がもう終わっている少女と、まだ何者でもない十三歳の私の話。

今年の二月、私はネパールに行った。ブトワール市にあるネパール子ども病院の視察の機会をもらったためだ。野良犬や野良牛がいると聞いていたので、衛生面とか治安の心配をして行ったが、多少埃っぽいだけで怖いことは何もなく、穏やかな土地だった。

ネパールに行って知ったのは、クマリという生き神の存在だ。二、三歳の良家の女兒が神に選ばれ、初潮を迎えた十三歳頃役割を終えてただの子どもに戻る。カトマンズのクマリの館でちらりと姿を見せた少女は、目は黒く縁どられ、額にはもう一つ目があるような独特の化粧をしていて神秘的だった。どっしりとした佇まいは自身を神と信じて疑わないような雰囲気だった。そして同時にとても可哀想だと思った。幼いころから「神」として育てられ、外にほとんど出られず勉強する機会ももてず、挙句の果てに、初潮が始まったら神じゃなくなる。一度クマリになった人は、プライドは高いのに体は弱くて一般的な常

識もないため、周囲から孤立してしまうらしい。人間に戻った後の生活が幸せな人は今までにあまりいなかったということだ。その後の人生のほうが長いのに。私は「十三歳で人生が終わる少女」の存在を知った。

案内してくださったネパール人の家にも行った。そこで私と同じ、中学生の少年と出会った。ネパールでは高校受験がとても大切で大変と言っていた。教科書を見せてもらったら、とても難しかった。だから私はネパールの教育は思っていたより進んでいるのだと驚いて、帰ってからネパールの教育制度を調べてみた。八年間が義務教育で無料。初等教育は男女差もなくほとんどの子どもが受けている。しかし、十三歳を過ぎると九割を超えていた就学率が六割台までガクンと下がる。その率は女子のほうが高い。いまだに低年齢での結婚が多く、十八歳未満の児童結婚が三割以上という。学校に行けない主な理由はその児童結婚や、児童労働、もっとひどいと児童売買でインドの売春宿に売られてしまう。都会に出稼ぎに行っておいでと言われて、両親によって売られる。無学なため、大人の言う事を疑うことを知らず、小さい部屋に閉じ込められて、一日何人もの客の相手をするという。暴力によって支配され逃げ出すのは無理と思いきまされ、そこでの暮らしを無気力に受け入れる。私も同じ状況なら、逃げるのか、今の状況を変えるということをききとあきらめてしまうと思う。その方がきつと楽だから。彼女たちの存在はネパールの現実の闇

だ。これが私がネパールから帰ってきてから知った「十三歳ですでに未来が終わっている少女」の存在だ。

私は今のネパールを知りたいと思ってネパール研修に参加した。なんでも見て食べて体験してみようと思った。スパイシーな食べ物も多かったけれど、どれもおいしかった。ネパール子ども病院の先生や看護師さんはとてもフレンドリーだった。ブトワール市の市長さんを表敬訪問したり、カトマンズの大学病院の見学もした。ふつうのネパール観光ではできない貴重な経験をたくさんした。でも実は、私の人生を変えるほどのことは何も起こらなかった。それは案内してくれた方がネパールの暗い闇の部分を見せないでくれたからだと思う。むしろ、帰ってきた後から現在のネパールについてたくさんを知った。

ネパールの少女達と自分の差について考えた。私は毎日、ご飯を用意してもらって学校に行き、授業を受けたり友達とおしゃべりしたり部活をしている。ほとんどの時間を自分のために使っている。私は今まで、なぜ勉強しないといけないのかを真剣に考えたことはなかった。でもネパールの少女達のことを考えていたら「自分の生き方を自分で決めて、考えて、行動できるようにするため」に勉強は必要だと思い至った。この世界には、自分の行動や人生を自分で決定できる環境にいない人がまだたくさんいる。特に女性は。イス

ラム諸国にも、アフリカにも、そしてアジアにも。

今の私とその国に行って何かできることは残念だけれど無い。私ができることは、自分の考えを自由に表出できない人がたくさんいることをいつも忘れずに、今何が問題なのかを日々知っていくことだと思った。日本でも、生きづらさを抱えた人はたくさんいる。助けを求められた時に、寄り添い、共に行動できる、柔軟で想像力のある大人に私はなりたい。私一人の力は小さいけれど、私の培った力が他の誰かの力と一緒に活かせるように、まずは自分の力を蓄えたい。誰もが、自分の考えを持って行動できる世の中になるように。それが「まだ何者でもない十三歳の私」が目指す未来だ。

高校生部門

最優秀賞

兵庫県立姫路西高等学校 二年

日常のかげら

杉本 英

ピピッ。慣れた手つきでICカードを読み取り機にかざしながらバスに乗り込む。あたりをキョロキョロと見渡してみる。空席はない。この時間のバスが満員なのはいつものこと。どうせ空いている席なんてないとわかっていながらも、空席をどこか期待して探してしまう。その期待が裏切られると、少し残念な気持ちと同時に、席を探している自分の姿が少し恥ずかしくなる。急いで近くの手すりをめがけて一直線に歩く。

いつもの塾帰り。時間もバスも、手につかんでいる手すりの場所までも、普段と変わらない。そう、これは私の日常の一部分。

所定の位置につき、少し重たいリュックを前にかける。いつもならここで、スマホを開いて家族に連絡をしたりネットニュースをひたすら読み込んだり。ボーッとスマホの画面を見ること数十分。最寄りのバス停のアナウンスが耳に入るまでは基本的には画面から目を離さない。ただ、この日はスマホを開いてはみたものの、なぜか見る気は失せてしまい、仕方なく画面を閉じた。先ほどの塾でうまくいかなかったからなのか、将来に対する不安

が高まっているのか。自分の怠惰さに嫌気がさしているのか、それでもなお変わろうとしない自分の姿がふと脳裏をよぎるからなのか。理由はわからないが、とにかく言葉には言い表せないモヤモヤした気持ちが私をとり囲んでいた。

次第にその気持ちは、いつもどおりで面白味もない毎日への苛立った感情さえ作り上げてしまった。何だよ、もう。ムシヤクシヤした感情を抑えるため、私は仕方なくあたりを見渡すことにした。

すると、ふと一人の乗客の手からペットボトルがすり抜けて床に転がった。その瞬間、近くにいた別の乗客がひょいと拾い上げ持ち主に手渡している様子が目に入った。何の変哲もない、よくある事だ。そうであるはずなのに、お礼を伝えて互いに笑顔になる二人を見て、どこか懐かしい感情が湧き出た。久しぶりにこんな状況見たよなあという言葉が頭に浮かんで消えない。なんだか奇妙で引っかかる。そんなことをぼんやり考えながら、他のところにも目をやる。うとうとと頭を揺らす女性。おそらくゲームに必死なおにいさん。音楽に乗って少し揺れているおじさん。窓の外の車を目で必死に追う男の子と、その様子を微笑んで眺めているお母さん。それだけじゃない。窓の外には、公園までダッシュする小学生の軍団。談笑しながらゆっくり歩く老夫婦。時計を気にしながら小走りでかけてくおねえさん。手を挙げて横断歩道を渡り得意げな顔を見せている少年とその様子をほめて

いるその子のお姉ちゃんらしき少女。どこのシーンを切り取っても、道德の教科書に載っているそうなくらいありふれていて知り尽くしているような風景。だが、そのおかげで私の心は、もはや冒険をしているかのようにワクワクしていた。そして、次々目に入る、町のどこかで起きた小さなドラマは自身が小さい頃はよく見ていたことに気づいた。

いつから目にしなくなったのだろうか。

きつとこのドラマは私が生きてきた十六年間、ずっと身近に起きていたのに、私はいつしか見なくなっていたのだらう。目の前の世界にとらわれ、一喜一憂する。スマホの中で、世界で起きた様々なドラマを見てこの世界のことを知った気になる。本当は数メートル先で起こった小さなドラマにさえも気づかずにいるのに。面白みのない日常に私を閉じ込め揺れていたハコはいつしか、どこかに転がっているたくさんさんの人の日常、ドラマのかけらを見せてくれる、ワクワクを詰め込んだ乗り物に早変わりしていた。景色が展開するにつれ、私の心は前を向き、なつかしさと新鮮さが共存する驚きが胸に響き渡る。

ピピッ。運転手さんに軽く会釈をしてバスを降りる。また、いつもの日常に戻ってきたが、心の興奮はまだ消えていなかった。バスは走り去り段々小さくなっていく。なんだか、楽しかった。目の前のことばかりに縛られていると苦しくなるけれど、少しアングルを引いてみれば、たくさんさんのドラマが映り込み、背中を押してくれる。多くの人の日常のかけ

らが私に元気を与えてくれる。少し時間がたてば、きっと私はまたすぐに目の前だけの今まで見てきた日常がすべてのように無意識のうちに感じるのだろう。けれど、行き詰ったときにバスの中で体感した不思議な世界に、みんなの日常のかげらに寄り道してみるのも悪くない。何ともまあ、らしくないことを考えながら、それでも収まらない興奮とともに、家を目指してゆつくりと歩きだしていく。

高校生部門

優秀賞

広島県 盈進高等学校 一年

街の「小場所」が残してくれたもの

足立 美咲

「五月末でこの店閉店することにしたんよ。」

積年の重労働でありえない角度に折れ曲がった腰を手で支えながら、彼女はそう言った。饒舌な関西弁を気持ちよく聞いていた私たちは突然飛び出した「閉店」という言葉に一瞬耳を疑う。と同時に彼女自身も本当はそれを伝えるつもりはなかったのだろう、思わず口をついてでた「閉店」という二文字の持つ現実味に戸惑いを隠せずにいた。

兵庫県尼崎市にある小林書店は、小規模ながら七十二年続く老舗の書店で、本の配達やビブリオバトルをおこなうなど、いわゆる「街の本屋」として地域から愛されてきた。「コバシヨ」という愛称は、地域住民の居場所となる「小場所」とも繋がるネーミングだ。店主の小林由美子さんが父親から受け継いだ本屋を震災や不況の波など幾多の困難から守り抜いてきた姿は、『仕事で大切なことはすべて尼崎の小さな本屋で学んだ』という本に描かれ、ドキュメント映画も制作されている。

私は学校で読書部という部活動をおこなっている。そこでは定期的に読書会を開催する

のだが二年前初めてこの本を手にとって小林さんの存在を知った。目標もなく出版社に就職した社会人一年目の大森理香が小林さんに出会うことで、仕事への情熱を見つけ出す物語。作中小林さんは本屋という仕事にかける熱い思いを語っているのだが、実在のモデルが存在するノンフィクションノベルだと知った私たちが読後最初に抱いたのは「この人に会ってみたい！」という正直な感想だった。

私たちはすぐに手紙を書くことにした。本を読んだ経緯や読書会で出た感想、小林さんに会いたいという気持ちを素直に伝えた。これまでも本の作者に手紙を書いた経験はあるが、返事が返ってきたことはなかった。今回もきつと一方的に思いを伝えるファンレターと思われるかもしれない。でも私たちは本を読んだ興奮の冷めぬうちに一気に書き上げた。驚いた。返事がすぐに返ってきたのだ。返事と言っても小林さんが学校に電話をかけてこられて「今手紙を書いて送ったんやけど、学校に行かせてもらおう思うてます。作者の川上さんにもすぐ連絡して、そんな学校あるなら見てみたい、行こ行こつてなりまして。」驚いた。何よりも小林さんの行動力に。本の中に登場する小林さんそのまま。そして本当に小林さんは作者と取次の方を引き連れて学校にやって来たのである。二〇二二年秋、コロナ第七波と第八波の狭間のことだった。

実際に小林さんにお会いしてさらに驚いた。小林さんはもう自立するのも困難なほど腰

が曲がっていたのだ。私たちの活動する図書館を案内する際もスーツケースにもたれる小林さん。しかし、座って話し始めるともう止まらない。関西弁炸裂。四十年以上本屋を営む中で「もうあかんかも」と思ったこと、奇跡のような体験、本への愛情などを日が暮れるまでたっぷり話された贅沢な時間だった。

コロナ禍がようやく沈静化した二〇二四年三月末、私たち読書部は念願の小林書店訪問という機会を得た。新幹線で神戸まで行き、尼崎まで電車で三十分。立花駅から商店街を抜けた先にあの青い屋根がある。十五名入ればもうお店は満員状態。初めて来たのになぜか懐かしいコバシヨで小林さんのあの関西弁が聞ける。よどみない話をうっとり聞いていた私たち。だがしかしその瞬間は訪れた。「五月末でこの店閉店することにしたんよ。」

小林さんの歩き方を見ればその理由は一目瞭然ではある。でも…でも…私たちは複雑な気持ちだった。体が辛くて本の配達を泣く泣く辞めた時、ボランティアでやって配達をしてくれる人が次から次へと現れたこと。店のシャッターを毎朝上げてくれる人がいること。コバシヨには奇跡が起き続けていたが、七十五歳の小林さんの決断は固いものだった。私たちは最後のコバシヨ訪問に間に合ったのだ。

街の小さな本屋がまた一つ姿を消す。それは本当に寂しいことだ。その多くは紙や配達費の高騰、電子本への移行、読者の減少など「本が売れない」ことによるものだが、実際

に全国の書店はこの十年間で三分の二程度に減少している。「書店ゼロ」の地域が全国の自治体の四分の一を占める現状を受け、先日経済産業省による「書店振興プロジェクト」が打ち出されたという。本に囲まれる感覚や、未知の本との出会いなど書店にしかない魅力をなくしてしまわぬように書店をサポートする方法を模索するようだ。

私は本が大好きだ。小林書店のような個性豊かな書店や図書館を訪れて、本のある空間の大切さも肌で感じてきた。インターネットで情報も娯楽も簡単に手に入る今、本の世界に浸ることの意味を改めて考えていきたい。

私は小林さんのこの言葉を胸に刻む。

「紙の本はなくならない。あなた達を見るとそう確信するよ」——小林さんから受け継いだ本の文化を、今度は私たちが守る番だ。

高校生部門

佳作

兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 一年

十九歳の母と私

桂 凛香

母は私を十九歳で産んだ。若くして私を産んだ母の苦労は私が想像を絶するほどだと思う。そんな母と私の関係は時に鏡のように思う。母は私に自分の若かりし頃を重ね、私は母を自分の未来と重ねる。しかし、そんな鏡にうつる私と母の間には、言葉にできない距離が横たわるように感じる。

母が私を産んだ年齢に近づくにつれ、私は母の青春がどんなものであったか、少しずつ理解できるようになった。友達と過ごす放課後の一瞬、恋愛、進路に悩む夜。それは、私が今まさに経験していることだった。それなのに、母と私の間にはどうしても埋められない溝があった。母は、私が生まれる前に持っていた夢を語ることはほとんどなかったが、時折、なつかしそうに過去の話をする時、その目には、微かな憧れと後悔がまじっているように見えた。私はそんな母の姿を見て、胸の奥に何とも言えない感情を抱いた。それは、母に対する尊敬と、母が私のためにあきらめたであろう未来に対する負い目だった。

母が私に望んだのは普通の幸せだった。良い成績を取り、少しでも偏差値の高い高校に進み、卒業後には安定した職業に就くこと。だけど私は、どうしても母の期待に応えるこ

とができなかった。高校受験に大きく関わる中学三年生の夏休み、私は母が通わせてくれた塾以外で勉強をしたことがなかった。高校に進学してから、母との会話はどこかぎこちなく、必要最低限の言葉を交わすようになっていた。一度、母と大きな喧嘩をしたことがある。中学三年生の時だった。進路について話し合う中で、母は私が選んだ道に対して反対のようだった。私はその瞬間、母が自分の人生を私に押し付けようとしているように感じた。腹が立った私は、母に自分が思っていることを全部ぶつけた。そんな私に対し、母は静かに私を見つめ、何も言わなかった。その沈黙が、私には重く居心地の悪さを感じさせた。母の若さは私にとってとても輝かしいものだった。十九歳で私を産み、その後の人生を全て家庭に捧げた母は、私が見た通りの母親としてではなく、一人の女性として存在していた。その存在が私をどこか不安定にさせたのかもしれない。私は母と同じくらいの年齢に近づきつつあるが、母がどんな心境で私を育ててきたのかまだ理解できずにいる。母はいつも私に優しい言葉をかけてくれる。そして時には、とても厳しい。私が落ちこんでいる時、母はいつもそばにいてくれた。それでも私は、素直に母の慰めを受け入れることができなかった。今考えてみると、母に対して素直になることが、自分の弱さを認めるように感じ、認めることが怖かった自分もいるのかもしれないと思った。

中学最後の年、私は進路をぎりぎりまで悩んだ。私にとっては、大きな選択だった。母

は私によりそいながらも、私の意見を尊重してくれた。それでも母に感謝の気持ちを素直に伝えることはできなかった。

だんだん卒業が近づいてきて、卒業式の流れをクラスで決める機会があった。そこで、私のクラスは退場前に舞台の上から一人ずつ家族、友達または先生に感謝を伝えることになり、私が一番に思いうかべたのは母だった。その日から卒業式の直前まで母に伝える言葉を必死に探していた。そして迎えた本番、私は母に「ままの娘に生まれてよかった。」と伝えた。母の前で泣くのは恥ずかしかったが、込み上げてくる思いで私は涙を流さずにはいられなかった。そして母のいる方向を見ると母の優しく微笑む姿が見えた。その瞬間、母の温もりを感じた。それと同時に、これまでの自分の不器用さや、母に対して素直になれなかったことを悔やんだ。母に感謝を伝えるべきことは他にも沢山あったが、不器用な私には出来ず、あの一言で母に伝えるしか出来なかった。あの言葉で母にどう伝わったかはわからないが、母の表情を見る限り、私の思いは伝わったことだろうと思う。その日から以前より、少し母と距離が縮まったように感じるが、今でも母と私の間にはまだ言葉にできない微妙な距離がある。

母と私。その関係は時に複雑で、言葉にできない感情が渦巻くものだ。私がどんなに努力しても、母に対して素直になれないままかもしれない。しかし、それでも母は私を愛し

てくれている。その事実が私の心に深く根付いている。私はその愛に応えるため、少しずつでも素直な自分を見つけていきたいと思っている。そして、自分に子供ができた時には母のように大きな愛情でつつみこみたいと思う。

一般部門

最優秀賞

福岡県 福岡市

母の終活

山本

築（図書館司書）

早朝の極楽橋駅に乗客はまばらだった。定刻どおりに発車したケーブルカーは深い木立のなかを規則的な機械音を立てながら進み、地上から遠ざかるにつれて下界から離れていくような錯覚を持った。五分ほどで高野山駅に到着すると、そこからさらにバスに乗り換えて奥の院口に向かう。バスは紆曲した小道をゆっくり進み、しばらくすると車窓の先には平安時代の古い建物が見えはじめた。寝不足の身体に振動が心地よく、後ろに流れていく景色を眺めていると自然とまぶたが重くなる。私は大きく伸びをした後で車内に視線を戻した。木々のあいだから射しこむ朝日がシートに陽溜まりをつくっていた。ふと、となりの席に目を移すと、大きな荷物を抱いた母は窓にもたれながら小さな寝息を立てていた。母の終活がはじまったのは、二年前の春のことだった。父はその半年前に他界していた。母の年齢を考えると、余生の過ごし方を意識するのも当然かもしれない。しかし、実家に呼ばれて目の前で活動を宣言されたときは、あまりに突然な話に驚かないわけにはいかなかった。しゅうかつ、という言葉には得体の知れない響きがあった。そんな息子の心配を

よそに、母は手短に身边整理を済ませると、宣言どおりに終活をはじめた。

母の終活の時間はおもに旅行に費やされた。諸々の手配は私の役目となり、旅程を決め、切符を購入し、二か月に一度程度の旅行に付き合った。母の終活の目的は判然としないものの、その身のまわりの世話をするのは悪い気はしなかった。これまでの生活のなかで母には迷惑をかけてきた。その恩返しと思えば手間と感ずることもなかった。旅の目的地はおもに名刹古刹と呼ばれるところで、九州各地の寺院をまわったあとは、関西にまで足を運ぶようになった。

一の橋から御廟まで続く参道は杉木立に覆われ、深閑とした空気が漂っていた。両脇には墓石と燈籠が建ち並び、すれ違う参拝客も神妙な顔で歩いている。小さな段差をゆつくり上がる母の歩調に合わせながら、一歩ずつ踏みしめるように足を進めた。

弘法大師はいまも生きながら修行を続けていると言われている。その御廟に向かって手を合わせていると様々なことが心に浮かんだ。他界した父のことや、これからの母のこと、もちろん、自分の生活についても考える必要があった。そのような雑念を振り払うように目を開けると、となりで背を丸めた母が熱心に何かを祈願していた。その様子をぼんやり眺めながら、母が頭を上げるのを待った。

壇上伽藍の付近には飲食店や土産物屋が並んでいた。昼食を済ませてからさらに西に向

かい、山王院や金堂を見物した。大門の門前からは山々の連なる先に紀淡海峡が見えた。高野山は多くの僧侶の修行の場となっている。その雰囲気を感じながらこの場所に立つと、まるで靈界から下界に臨んでいるような気持ちになった。

高台から眼下に広がる景色を眺めていると、ふいに先ほどの母の横顔が思い出された。母は寺院に参拝するたびに熱心に頭を下げていた。あまりに長く手を合わせているため、こちらが不安になるほどだった。母は残りの人生に何を願っているのだろう。過去には母に手を引かれながら、半ば導かれるように物事の選択をしていた。この頃は何かにつけて母に頼られることが多くなっていた。門の横の階段に腰かける母を見やりながら、その老いを認めないわけにはいかなかった。

「どこか身体の調子が悪いとか？」

金剛峯寺のそばにある休憩所でお茶を頂きながら、私はなるべく深刻にならないように意識しながら尋ねた。

「べつに、どがんもなかよ」

母はやはりはぐらかすように笑って答えた。私はその返答が腑に落ちなかった。母の真意を推し量りながら、これまで何度も抱いた疑問を投げかけた。

「だって、急に終活とか言い出すのって、やっぱりおかしいじゃん」

部屋にはほかにも参拝客の姿があつた。なかには年配の客も多く、あちこちで輪を作つて談笑していた。母はそちらに一度目を向けてからお茶を一口すすつた。

「あんたに親孝行でもさせてやろうと思つたみたい」

温かい緑茶の入った湯呑を膝の上に置きながら母はもう一度笑つた。母は昔からよく冗談を言う人だつた。その他愛のない言葉は家族を和ませる力を持っていた。親を扶ける立場となつた私は、息子として母の身体を心配しつつ、いつもの冗談に安心していた。

「まだまだ親孝行ばせなんね」

参拝を終えて下山するとき、和歌山駅の方角に沈む西日が見えた。高野山を離れたケールカーが地上の駅に到着すると、ひさしぶりに浮世の空気を吸つたような気がした。

一般部門

優秀賞

大阪府 河内長野市

何もない春

吉沢 慎一郎（カメラマン・観光ライター）

がらんとしていて、ただ風が吹いていた。青龍の背びれのような青い日高山脈が、太平洋に沈みこむ場所。襟裳岬に立ち、はるか大海原を眺めた。岩礁が遠くまで続き、岩を洗う荒々しい白波が、目に染みた。何もない。何もない春を、ただ眺めてみたかった。

勉強もできず、友だちもない。秀でた才能もない。目立たないように、じっと息をひそめて生きていた思春期の私は、深夜ラジオから流れる歌が唯一の友だちだった。

集団生活に馴染めなかった。記憶力も、計算能力もない。いじめられても、それを親や先生に説明することができない。ひたすら、がまんし続け、私はしゃべれなくなっていた。自分が発達障害だとわかったのは、その後、何十年も経ってからのことだった。

そんな私にとって、ラジオから流れる歌だけが、心の拠り所だった。中島みゆき、松山千春、さだまさし、かぐや姫、よしだたくろう。彼らの歌は、よどみなく私の心に流れ、いつしか遙かな旅路に憧れるようになった。

あのころ、演歌が好きになれない私にとって、衝撃を受けた歌がある。森進一が歌う、『襟

裳岬』だ。静かに語りかけるように歌い始める森進一の歌声は、いつもとちがっていた。何かが憑依したような、ただならぬ、鬼気迫るものを感じる。それでいて、樹氷のような繊細な美しさと、やさしさを感じる。

襟裳岬を見たい。「何もない春」を感じたい。その想いは、日増しに強くなった。十五歳の春。私は家出した。自転車に乗って。もう二度と家に帰らないと決心した。

旅の果てにたどりついたのは、北海道の日高地方だった。四月の日高はまだ寒く、冬だった。力つきた私は、荒野に倒れた。軽トラで通りかかった牧場の人に助けられ、そのまま競走馬の育成牧場で働くことになった。最初は狂暴だった馬も、心を込めて飼育してゆくうちに私に心を許すようになった。騎手になろう、と思った。牧場で働き始めて三カ月。偶然、牧場の人が見ていたテレビの公開捜査で、私が家出人ということを知られ、テレビ局に電話した。その日の夕方、母が迎えに来た。母はすっかりやせ細り、私の顔を見て泣き続けていた。その日は、近くの町の旅館に母と二人で泊まった。しばらく休んでいい、と牧場主が言うので、母と襟裳岬に向かった。日高本線で様似まで行き、バスに乗り継いで襟裳岬に向かった。青い海が窓の外に広がる。黄色い蝶の鱗粉のように太陽の光が輝いていた。私は胸を躍らせて海を見ていた。だが、バスの後部座席にぼつんと座った母は、

窓の外を一度も見ることではなく、ひどく淋しそうに、うなだれてうつむいたままだった。

母と二人、襟裳岬に立った。がらんとしていて、ただ風が吹いていた。はるか大海原を眺めた。さいはての岬から見る夕暮れの海は、柔らかくて細やかな金箔を敷き詰めたように、澄んだ黄金色に光り輝いていた。空が、穏やかに暮れてゆく。赤っぽい紫から、青っぽい紫へ。空は色彩にあふれていた。水色や黄色、オレンジ色、金銀の光が幾層もの縞をつくり、靄のように流れ、色はかさなりあいながらも澄みきったままで、それぞれの色を際立てながらも互いに調和し、空のアルペジオのような美しい和音を響かせていた。見たこともないような不思議な生命体が、歌を歌っているみたいだ。「偉くならなくていい。お母さんを泣かせるようなことだけはしないで欲しい」と、母は言った。しばらく牧場で働いた後、母との約束を守り、私は家に戻った。

あれから、何十年もの時が流れた。母は認知症になり、自宅で転倒し、大けがを負った。徘徊も始まっていた。母の安全を考えると、施設に預けるしかなかった。

施設から母を連れ出し、近所のスーパーに出かけて行って、母に大好物のお寿司を食べさせた。母は私に優しい。「お兄ちゃんも食べ」と言って、好きな寿司を私に食べさせようとする。「大丈夫だよ。みんな食べていいよ」と私は何度も繰り返す。だが、母は施設内で職員に暴言を吐いたり、手をはたいたりすることがあるらしい。「あんたら怖い」と

母は言う。母は悪くない。母のことをわかる人が誰もいないからだ。母は施設を追い出された。今は隔離病棟にいる。面会にも行けない。手紙を渡すこともできない。母は誰からも見放され、死のうと思っっているのに違う。今、私は思う。襟裳岬の歌は、森進一が亡き母への祈りを込めた歌。だから、あんなにも胸に迫る気迫があったのだ。私は心で母に話しかける。大丈夫だよ、心配いらないよ。苦しみも不安も淋しさも悲しみも、ぜんぶ僕が受け止めてあげるよ。この世のほかに、どこにも行く場所がなくても、僕がいるよ。だから、安心していいよ。だから早く、ゆっくり病気を治してね。元気になったら、襟裳岬に行こう。何もいらぬ。何も欲しくない。何もない春を、ふたりで見に行こう。

一般部門

佳作

アメリカ ニューヨーク

地下鉄のクリスマス

茂木 麻予（自営業）

クリスマスイブに、夫とスタテン島の親戚のパーティーへ行った。その帰り、マンハッタン島の南端までフェリーで戻り、地下鉄の駅へ向かった。真夜中過ぎの駅は祝祭的な雰囲気満ちていた。多種多様の人種・民族の人々が、大人も子どもも、サンタクロースの帽子やトナカイの赤鼻、角の被り物を着けたまま、氷点下のニューヨークの夜風に頬や鼻先を赤く染め、のんびり電車を待っていた。

寒さに震えた私は、マフラーをフェリーに置き忘れたことに気がついた。数年前にデパートで購入したカシミア製のものだ。気に入っていたというより値が張ったというケチ臭い理由で、ほろ酔いが一気に醒めてしまった。

その時、視界の隅から細長い影が近づき、「すみません、〇〇駅への行き方を教えてもらえますか?」といった。見れば長身の黒人女性だ。端正な、まだあけなさの残る顔立ち、女性というより少女という方がしっくりする。棒のような腕に、白いタオル地のおくるみに包んだ赤ちゃんを抱いていた。肩から提げたトートバッグの持ち手が片方落ち

て、オムツや哺乳瓶が見える。この寒空の下、Ｔシャツに薄っぺらな上着を羽織っているだけで、乾いた紫色の唇が細かく震えている。

夫が乗り換えの駅などを説明すると、少女はどこか遠い宙の一点に視線を置いたまま、時おり駅名などを小声で繰り返した。礼をいって少女はホームの柱の傍に戻り、ぼんやり佇んでいた。大丈夫だろうかと気にしながらも、これといってかける言葉も勇気も見つからず、そうこうするうち列車が到着した。冷え切った体はその状況から逃げるように、自然と足早に車内へと向かう。少女も同じ車両に乗り込み、私らの斜め向かいに座ると、おくるみの中で泣き出した赤ちゃんをたじろぐように見おろしていた。

赤ちゃんの激しい泣き声が車内に響き渡る。しばらくして、堂々とした体格の若い白人女性が、離れた席から移動してきて少女の隣にどかっと腰をおろした。青白い電灯の下、周囲の色を吸収して封じ込めたかのような漆黒の短髪を九対一に分け固め、鼻と耳には無数のピアスが無機質な冷たい光を放つ。ブロンズの薄い眉、マットな質感の黒のアイシャドウと口紅、黒革のロングコートとズボンに厚底の編み上げ靴を履き、何か考えるように前を見たままガムを噛む。少女の顔が強張る。

女性はポケットから消毒ジェルを出し、少女と私たちの視線の纏わりつくタトゥーだらけの手指を一本一本、時間をかけて丁寧に消毒した。女性がおくるみの中の赤ちゃんを覗き

込んだ。自分が呼吸を止めてそれを見ているのを自覚する。「ハ―イ、どちたの―？元氣ね―。あたちはサラでちゅよ―」。

意外にもキュートな声と赤ちゃん言葉に、緊張した空気が緩んだ。サラは「いないないばあ」をした後、踊りながら歌い始めた。クリスマスソングを歌いながら頭でリズムを刻み、斜め向いの私、その隣の夫と、数秒ずつ目を合わせてくる。黒のアイラインに縁取られた淡青の瞳は、目に沁みるほど陽に輝く海を小さなレンズで覗いているようだ。その海に吸い込まれるように、さっきは勇気を持てず複雑な気持ちから逃げ出した私が、気がつけば魔法にかけられたように『赤鼻のトナカイ』を口ずさんでいた。隣の夫も不思議な笑みを浮かべて両手を上に挙げ、歌に合わせて海藻のようにユラユラと揺れている。

サラが、持っていた紙袋から包みを取り出した。派手なクリスマス柄の包装紙を破くと、ポンポン付きのグレーのニット帽と、揃いのマフラーが入っていた。そのニット帽を少女に被せ、マフラーを細い首にグルグル巻くと、少女は目をパチクリさせた。サラは包みをもう一つ開ける。今度はクマのぬいぐるみだ。「パーフェクト！」とにっこり笑い、おくのみの赤ちゃんの脇にそっとそれを差し込んだ。空になった紙袋を丸めて傍に放ると、ポケットを探り、地下鉄のプリペイドカードを見つけて「まだ十ドルくらいあるよ」と少女の上着のポケットに入れた。圧倒されて言葉を失っていた少女が、ようやく「ノー、ノー、

もらえないわ」というと、「いいの！そのうち使うでしょ」と応えて少女のバッグの持ち手を肩に掛け直し、トントンとその細い肩を優しく叩いた。少女は「かなわないなあ」とでもいうように首を振り、初めて微笑んだ。頬と唇にフワリと赤みが差した。

どのような事情で、クリスマススイブの真夜中に少女が赤ちゃんを抱き、独り地下鉄に乗っているのか、サラはきかないままだ。いま、赤ちゃんは元気に泣き、少女は微笑んでいる。サラは満足そうに寛いだ様子でそれを見ていた。他の乗客も私らの歌と海藻ダンスに加わっていた。私らはただ、赤ちゃん少女のために微笑み、歌い、ユラユラと踊り続けた。それは信仰のない私にすら祈りというほかに呼びようのない、どこか神聖な経験だった。

令和6年度 第10回 藤原正彦エッセイコンクール 概 要

■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

プロフィール

昭和18年 旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。
昭和53年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成22年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成26年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。
そのほか、『国家の品格』『日本人の真価』『美しい日本の言霊』など著書多数。
平成26年4月、姫路文学館長に就任。近著に『藤原正彦の代表的日本人』。

■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400字詰め原稿用紙5枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。令和6年9月18日締め切り。

■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各1編。
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

■ 応募状況 … 応募総数 2,276点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	333点	158	175	333	0	0
高校生部門	1,339点	858	209	1,067	272	0
一般部門	604点	45	70	115	487	2
合計	2,276点	1,061	454	1,515	759	2

中学生部門：市外では、兵庫県宝塚市、三木市、加東市、明石市、赤穂市から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は10校であった。

高校生部門：県外では、埼玉県、神奈川県、山梨県、岐阜県、大阪府、広島県、徳島県、福岡県、佐賀県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は14校であった。

個人応募者は4人であった。

一般部門：北海道から沖縄県まで、全国から応募があった。

アメリカ在住の日本人からの応募もあった。

■ 表彰式

日時：令和7年1月19日（日）午後1時30分～3時

会場：姫路文学館 講堂（北館3階）

第10回 藤原正彦エッセイコンクール
入賞作品集

編集・発行 姫路文学館
〒670-0021 兵庫県姫路市山野井町84番地
TEL (079) 293-8228

令和7年(2025年)1月19日発行